

RIDE ライド・アドベンチャー ADVENTURE



独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立山口徳地青少年自然の家

目 次

はじめに

I	過年度事業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1	令和3年度（1年目）	
2	令和4年度（2年目）	
3	令和5年度（3年目）	
II	令和6年度の事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
1	本事業の目的と目標	
2	ファシリテーションについて	
3	事業概要	
III	令和6年度の事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
1	プログラムデザイン	
2	プレステージ	
3	メインステージ	
4	安全対策・運営上の工夫	
IV	令和6年度の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
V	調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
1	調査の目的	
2	質問紙の構成	
3	調査の手続き	
4	四年間の調査結果	
5	事業効果の分析	
VI	四年間の取組とその成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17

おわりに

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大によって、私たちの生活が大きく変貌した 2020 年、本事業は産声をあげました。

友達はじめ他者とのかかわりの中で成長する子どもたちにとって、ステイホームやソーシャルディスタンス、マスク推奨といった言葉が、子どもたちの生活をごんじがらめにし、成長の機会が失われてしまうという危機感から立ち上げたものです。折しも文部科学省において提唱された GIGA スクール構想により、学校におけるタブレット端末等 ICT 機器の導入が進められたこともあり、これらの活用にも着眼し、公共交通機関を使って目的地を目指す形態で、長期宿泊を伴う体験活動事業をスタートさせました。

令和 2 年度は山口県内の教育施設をめぐりながら各所で自然体験活動を行いました。移動制限が解除された後の令和 3 年からは、中四国地区の国立施設をまわるスケールの大きい事業を展開しました。

そして令和 6 年度からは、移動手段を公共交通機関からマウンテンバイクに替え、自らの力で目的地を目指す形態に変更しました。これまでの事業に、体力的にも精神的にも挑戦的な課題を設定し、達成感を高めたいという狙いを持っての変更です。熱中症や交通事故リスクとの戦いではありましたが、無事に終えることができました。

形態は変わっていますが、「仲間とコミュニケーションをとりながら課題解決にあたる」というベースは存在します。その根底には当施設で長年培ってきた徳地アドベンチャー教育プログラムで培ったファシリテーションのノウハウが活かされています。

私たちは青少年にとって最高の教育プログラムを提供したい想いで、またこんな時代だからこそ体験活動の教育的な可能性を信じて、これからも試行錯誤していきたいと思っています。本報告をご一読いただき、忌憚のないご意見等を頂戴いただけますと幸いです。

令和 6 年 3 月

国立山口徳地青少年自然の家
所 長 片 山 貞 実

I 過年度事業の概要

1 令和3年度（1年目）

「みんなで協力！ライドアドベンチャー！～太平洋を見に行こう！お正月 Ver.」

（1）目的

グループの力を借りて様々な「生活体験」「社会体験」をする中で、力を発揮できる空間を作る方法をしながら、自らも暖かい空間を体感することで自己有用感を高める。

また、グループ内の関係が深くなることで、コミュニケーションの場を増やし、様々な事にチャレンジすることで、成長できる自分を見つけ自己肯定感を高める一助とする。

（2）事業の日程・参加者（小学校5・6年生 計11名）

●令和3年7月17日～18日 プレステージ

【仲間と出会い関係の基礎を育むステージ】

日にち	プログラムの内容	宿泊場所
7/17（土）	開会式 仲間づくり（TAP） 保護者説明会 メインステージの説明①	山口徳地青少年自然の家
7/18（日）	仲間づくり（TAP） メインステージの説明② 目標設定	

●令和4年1月4日～9日 メインステージ

【関係を築きながら様々な課題を解決していくステージ】

- ・中四国地区の国立青少年教育施設（5施設）を宿泊地として自分達の力で移動する。
- ・日々、グループにはミッションが与えられ、それをクリアしながら目的地を目指す。
- ・室戸青少年自然の家、大洲青少年交流の家では施設の体験活動を実施し、グループ活動の中で個の成長を促す。

日にち	プログラムの内容	宿泊場所
1/4（火）	グループワーク 行程準備等	山口徳地青少年自然の家
1/5（水）	山口駅→大田市駅	三瓶青少年交流の家
1/6（木）	三次駅→吉備青少年自然の家入口（バス停）	吉備青少年自然の家
1/7（金）	吉備青少年自然の家入口→元（バス停）	室戸青少年自然の家
1/8（土）	マイクロバス移動	大洲青少年交流の家
1/9（日）	スポーツライミング マイクロバス移動	

（3）成果と課題

参加者の兄弟姉妹が参加するなど、内容の楽しさや成長を感じられた参加者やその親族が事業の趣旨に賛同するパターンが多くみられるようになった。また、スタッフのスキル向上（事業の企画立案やファシリテーションスキル）の一助になっていることがこの事業の成果であると考ええる。

新型コロナウイルス感染症の状況により開催時期が夏から冬になってしまった。今後も、このようなことも考えられることから、開催時期や内容について精選していく必要がある。

2 令和4年度（2年目）

「みんなで協力！ライドアドベンチャー！～太平洋を見に行こう！～」

（1）目的

グループの力を借りて様々な「自然体験」「生活体験」「社会体験」をする中で、力を発揮できる空間を作る方法を知りながら、自らも暖かい空間を体感することで自己有用感を高める。

また、グループ内の関係が深くなることで、コミュニケーションの場を増やし、様々な事にチャレンジすることで、成長できる自分を見つけ自己肯定感を高める一助とする。

（2）事業の日程・参加者（小学校5・6年生 計14名）

●令和4年7月9日～10日 プレステージ

【仲間と出会い関係の基礎を育むステージ】

日にち	プログラムの内容	宿泊場所
7/9（土）	開会式 仲間づくり（TAP） 保護者説明会 メインステージの説明①	山口徳地青少年自然の家
7/10（日）	仲間づくり（TAP） メインステージの説明② 目標設定	

●令和4年8月5日～12日 メインステージ

【関係を築きながら様々な課題を解決していくステージ】

- ・中四国地区の国立青少年教育施設（6施設）を宿泊地として自分達の力で移動する。
- ・日々、グループにはミッションが与えられ、それをクリアしながら目的地を目指す。
- ・室戸青少年自然の家、大洲青少年交流の家では施設の体験活動を実施し、グループ活動の中で個の成長を促す。

日にち	プログラムの内容	宿泊場所
8/5（金）	出発準備（タブレットの使用方法、時刻の調べ方等）	山口徳地青少年自然の家
8/6（土）	山口駅→大田市駅	三瓶青少年交流の家
8/7（日）	三次駅→切串港	江田島青少年交流の家
8/8（月）	切串港→吉備青少年自然の家入口（バス停）	吉備青少年自然の家
8/9（火）	岡山駅→元（バス停）	室戸青少年自然の家
8/10（水）	スノーケリング、ビーチホッピング体験	室戸青少年自然の家
8/11（木）	マイクロバス移動	大洲青少年交流の家
8/12（金）	8m スポーツクライミングチャレンジ マイクロバス移動	

（3）成果と課題

コロナ禍の中で開催でき、子どもたちの成長も見ることができたことは成果であると考える。

今後も継続していくためにはスタッフのスキルと安全管理用のバスの運用等について持続可能な形を模索する必要がある。

3 令和5年度（3年目）

「ライドアドベンチャー！～太平洋を見に行こう！～」

（1）目的

グループの力を借りて様々な「自然体験」「生活体験」「社会体験」をする中で、力を発揮できる空間を作る方法を知りながら、自らも暖かい空間を体感することで自己有用感を高める。

また、グループ内の関係が深くなることで、コミュニケーションの場を増やし、様々な事にチャレンジすることで、成長できる自分を見つけ自己肯定感を高める一助とする。

（2）事業の日程・参加者（小学校5・6年生 計14名）

●令和5年7月8日～9日 プレステージ

【仲間と出会い関係の基礎を育むステージ】

日にち	プログラムの内容	宿泊場所
7/8（土）	開会式 仲間づくり（TAP） 保護者説明会 メインステージの説明①	山口徳地青少年自然の家
7/9（日）	仲間づくり（TAP） メインステージの説明② 目標設定	

●令和5年8月12日～19日 メインステージ

【関係を築きながら様々な課題を解決していくステージ】

- ・中四国地区の国立青少年教育施設（6施設）を宿泊地として自分達の力で移動する。
- ・日々、グループにはミッションが与えられ、それをクリアしながら目的地を目指す。
- ・室戸青少年自然の家、大洲青少年交流の家では施設の体験活動を実施し、グループ活動の中で個の成長を促す。

日にち	プログラムの内容	宿泊場所
8/12（土）	出発準備（タブレットの使用方法、時刻の調べ方等）	山口徳地青少年自然の家
8/13（日）	山口駅→大田市駅	三瓶青少年交流の家
8/14（月）	三次駅→切串港	江田島青少年交流の家
8/15（火）	切串港→三原駅 ※台風接近のため目的地を変更	吉備青少年自然の家
8/16（水）	吉備青少年自然の家入口（バス停）→元（バス停）	室戸青少年自然の家
8/17（木）	室内活動、廃校水族館見学	室戸青少年自然の家
8/18（金）	マイクロバス移動	大洲青少年交流の家
8/19（土）	8m スポーツクライミングチャレンジ マイクロバス移動	

（3）成果と課題

台風の接近などもあったが、子どもたちのチャレンジの機会を尊重し、ルートを変更し、安全に実施することができた。子どもたちの状況に合わせて、適切な介入を模索することはスタッフのファシリテーションスキルの向上する機会となった。

長距離移動のためマイクロバスの運転を行うスタッフへの負荷が大きい。実施期間中の中間に参加者とスタッフの個別の面談等を行うことで、グループへの適切なファシリテートができると感じた。

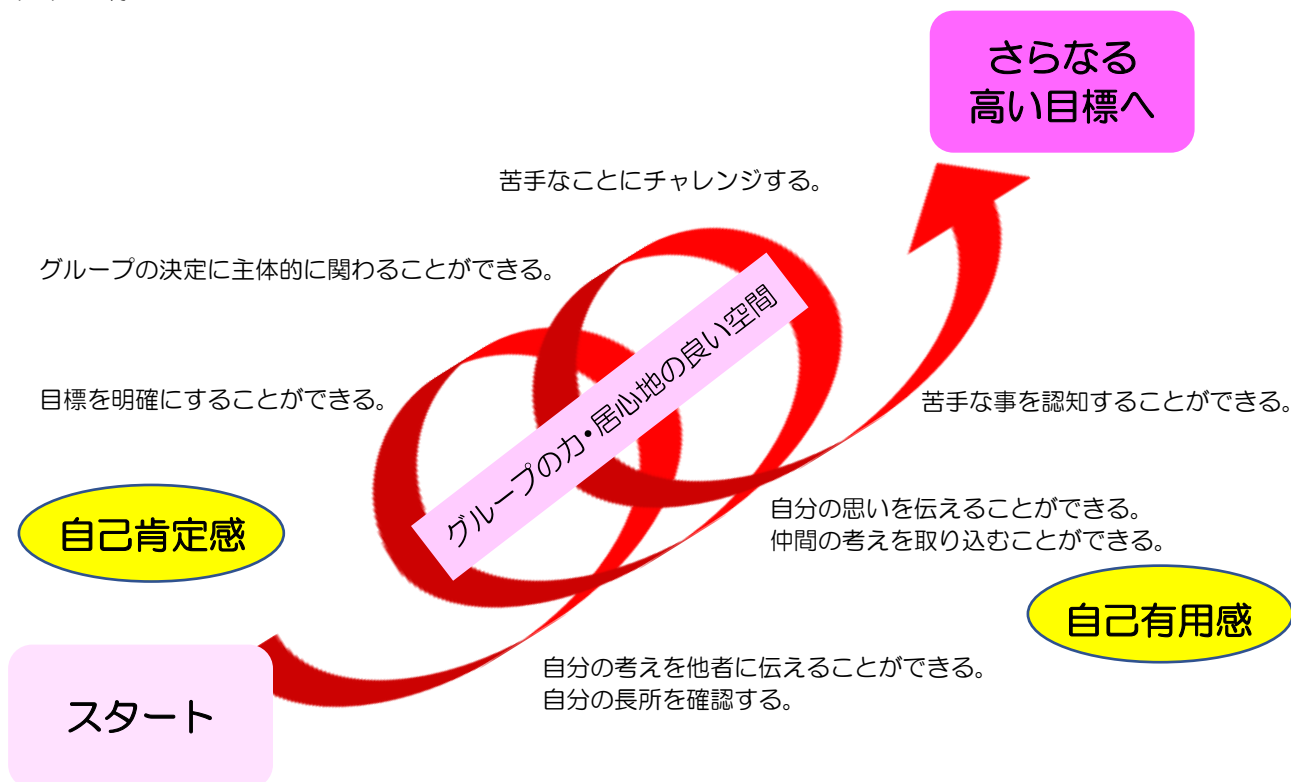
Ⅱ 令和6年度の事業概要

1 本事業の目的と目標

(1) 目的

グループの力を借りて様々な「自然体験」「生活体験」「社会体験」をする中で、力を発揮できる空間を作る方法を知りながら、自らも居心地のよい空間を体感することで自己有用感を高める。また、グループ内の関係を深めながら、コミュニケーションの場を増やし、様々な事にチャレンジすることで、成長できる自分を見つけ自己肯定感を高める一助とする。

(2) 目標



2 ファシリテーションについて

本事業は、徳地アドベンチャー教育プログラム(TAP)の考え方に基づいたかわりを重視している。TAPとは、山口徳地の自然の中で、一人では解決できない課題に対し、他者と力を合わせて挑戦し解決していく過程を通して、思いやりやチームワーク、自己肯定感を高めるプログラムである。年間約130団体、10,000人が利用している人気プログラムであり、TAPの指導者(ファシリテーター)は、グループの特性や成長度合いに合わせて、最適なアクティビティを提供し、ファシリテーションを行っている。

グループの発達段階に応じて、ファシリテーターのグループへのかかわり方は大きく変わってくる。プレステージやメインステージ前半は、ファシリテーターは個人やグループの様子を観察し、参加者の人間関係についての実態を把握することに努めた。また、参加者が野外炊飯やテント設営、マウンテンバイクの基礎的な知識・技術等が段階的に習得できるようにした。メインステージ中盤以降は、行程作成やマウンテンバイクツアー、野外炊飯等でのファシリテーターの介入は最低限にとどめ、参加者同士の主体的なつながりを尊重した。

3 事業概要

(1) 期日

【プレステージ】令和6年7月 6日(土)(日帰り)

【事前踏査】令和6年8月 3日(土)(日帰り)

【メインステージ】令和6年8月11日(日)～8月18日(日)(7泊8日)

(2) 参加者

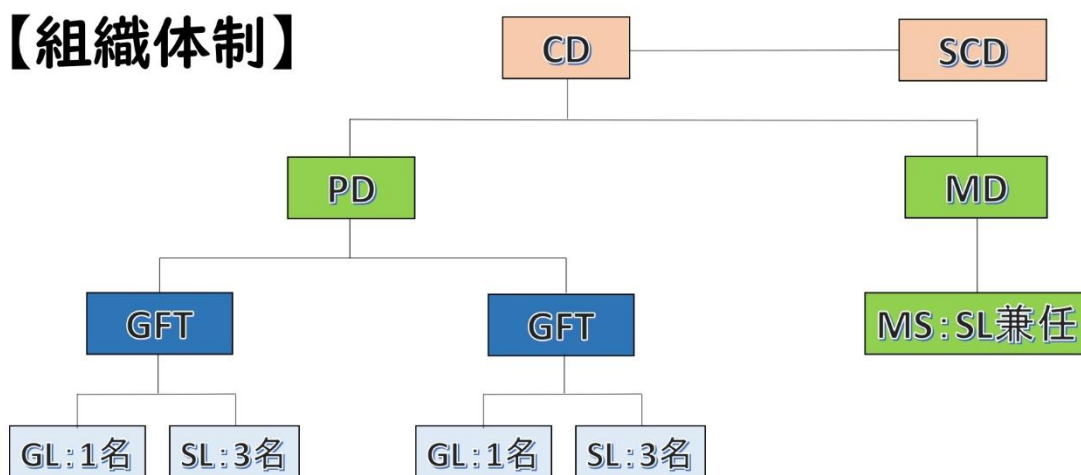
【対象】小学5年生～小学6年生 16名(男子8名、女子8名)

【人数】小学5年生男子：4名 小学5年生女子：4名

小学6年生男子：4名 小学6年生女子：4名

山口市：6名 防府市：3名 周南市：6名 光市：1名

(3) スタッフ体制



CD(キャンプディレクター):事業の総括

SCD(サブキャンプディレクター):事業の総括補助

PD(プログラムディレクター):事業の進行・管理

GFT(グループファシリテーター):グループの支援や成長を促進する。

GL(グループリーダー):GFTの後方支援(法人ボランティア)

SL(セーフティリーダー):安全面を中心としたGFTの補助

MD(マネジメントディレクター):物品支援・後方支援

MS(マネジメントスタッフ):MDの後方支援



Ⅲ 令和6年度の事業内容

1 プログラムデザイン

- ・小学5・6年生を対象とし、山口県内の青少年教育施設やキャンプ場を宿泊地として、グループで力を合わせてマウンテンバイクを漕いで移動していく。
- ・移動中にはミッションに連動したチェックポイントがあらかじめ定められており、各グループはミッションをクリアしながらその日の目的地へ向かう。
- ・ミッションや目的地の情報等を調べたり、グループで行程を作成したりするために、グループにはタブレット端末が1台提供される。
- ・グループ内で起こったことは、参加者の話し合いで解決することを基本とし、スタッフはファシリテーターとして関わる。

2 プレステージ（令和6年7月6日）

【仲間と出会い関係の基礎を育むステージ】

日にち	プログラムの内容	活動のポイント
7/6（土） 【活動場所】 徳地地域交流センター	人間関係づくり（TAP） 保護者説明会 	・初めて出会う仲間との人間関係づくり

※当初、山口徳地青少年自然の家で1泊2日で開催する予定だったが、本所への取り付け道路が土砂崩れにより通行止めになったため、徳地地域交流センターでの日帰り開催とした。

3 メインステージ（令和6年8月11日～18日）

【関係を築きながら様々な課題を解決していくステージ】

日にち	プログラムの内容	活動のポイント
8/11（日） 【宿泊場所】 山口徳地青少年自然の家	はじめの会 人間関係づくり マウンテンバイク練習 野外炊飯（カレーライス） ミーティング 	・人間関係づくり ・マウンテンバイクの基礎的な技術の習得 ・野外炊飯に必要な知識・技術の習得
8/12（月） 【宿泊場所】 山口徳地青少年自然の家	マウンテンバイク練習 ミーティング テント設営練習 荷物整理・準備 	・個人やグループの目標設定 ・テント設営に必要な知識・技術の習得

8/13 (火) 【宿泊場所】 ネムの丘キャンプ場	マウンテンバイクツアー① (約 42 km) 山口徳地青少年自然の家→ネムの丘キャンプ場 【チェックポイント】 ①佐波川関水 ②ふれあいパーク大原湖 ③名草駅 ④山口市阿東地域交流センター生雲分館 ⑤雲林寺 ⑥むつみフラワーロード テント設営 野外炊飯 (カルボナーラ) ミーティング 	・マウンテンバイクの技術の確認 (個人・グループ) ミッション 8月13日(火) ①名草駅で電車とにっしょに写真を撮ろう！ ②雲林寺で猫かぶりしよう！ ③フラワーロードでひまわりと背比べしよう！ 
8/14 (水) 【宿泊場所】 松島キャンプ場	マウンテンバイクツアー② (約 52 km) ネムの丘キャンプ場→松島キャンプ場 【チェックポイント】 ①道の駅ハピネスふくえ ②松陰神社 ③萩市中央公園 ④道の駅萩・さんさん三見 ⑤交通安全石碑 (三隅下豊原交差点) 食材買い出し (各グループ 2 名) テント設営 野外炊飯 (班別メニュー) 個人面談 ミーティング 	・栄養バランスを考えた夕食メニューの考案 (スタッフと一緒に) ・スタッフが参加者の様子を把握し、ファシリテーションに活かすための個人面談の実施 ミッション 8月14日(水) ①ハピネスふくえでハッピーな写真を撮ろう！ ②松陰神社で学業成就を祈ろう！ ③中央公園の芝生で寝ころぼう！ 
8/15 (木) 【宿泊場所】 油谷青少年自然の家	マウンテンバイクツアー③ (約 34 km) 松島キャンプ場→油谷青少年自然の家 【チェックポイント】 ①交通安全石碑 (三隅下豊原交差点) ②村田清風記念館 ③黄波戸駅 ④貴布弥神社 ⑤サンマート人丸店 食材買い出し 野外炊飯 (班別メニュー) ミーティング 	・栄養バランスを考えた夕食メニューの考案 (参加者中心) ・スタッフはグループの判断を見守りながらの安全管理の実施 ミッション 8月15日(木) ①村田清風記念館の顔はめパネルで写真を撮ろう！ ②貴布弥神社で旅の安全を祈ろう！ ③サンマート人丸店で夕食の買い出しをしよう！ 

8/16 (金) 【宿泊場所】 油谷青少年自然の家	チームチャレンジ (シーカヤック) マウンテンバイクツアー④ (約 20 km) 【チェックポイント】 ①ながれだ (トイレ) ②ローソン豊北阿川店 ③海士ヶ瀬公園 ④しおかぜの里角島 油谷自然の家→角島灯台 ミーティング 	・油谷青少年自然の家職員によるシーカヤック指導 ・マウンテンバイクツアーのゴールを迎えた達成感 ミッション 8月16日(金) ① 角島大橋をバックに写真を撮ろう！ ② 海沿いでしおかぜを感じよう！ 
8/17 (土) 【宿泊場所】 山口徳地青少年自然の家	バス移動 片付け BBQ ラストナイトミーティング 	・個人やグループの目標のふりかえり ・自分自身の成長の実感 ・仲間のよさの実感
8/18 (日)	ふりかえり おわりの会 	・キャンプを通して学んだことをこれからの生活に活かそうとする意欲の向上



4 安全対策・運営上の工夫

(1) マウンテンバイクでの安全対策

- ・各グループにサポートの車両がつき、緊急時に備えた。
- ・走行中、隊列の中と最後尾にスタッフがつき、後方からの一般車両に対する注意喚起や、健康状態の観察を行った。
- ・概ね 10km ごとに給水ポイントを設け、冷たい水分が補給できるようにした。
- ・隊列の先頭と最後尾は 30m以上離れないように声かけをした。



(2) 健康観察・熱中症対策

- ・プレステージで暑熱順化についての資料配布、説明を行い、活動に適した服装の見本を準備した。
- ・毎朝・晩に参加者の自己申告とスタッフによる健康観察を実施した。
- ・健康観察により異常が認められる場合は、休息や病院への診察等の処置を施すことを保護者説明会で説明した。
- ・参加費でマウンテンバイクに取り付けられる保冷機能付きの水筒を購入し、個人に配布した。
- ・基本的に、朝の涼しい時間帯からの行動を心掛け、午後の暑い時間帯に差し掛かる場合は、こまめな休憩や水分補給、ペースを緩める等の声かけを徹底した。



(3) ミッションの設定

- ・各グループがバラバラになりすぎないように、また通過時間の把握のためにポイントを設定し、そこでのミッションを課した。
- ・ミッションは、行程計画を作成する際に各グループのタブレット端末に送信した。
- ・ミッションの達成は、各グループのタブレット端末から、プログラムディレクターに送信した写真によって判断するものとした。



Ⅳ 令和 6 年度の成果と課題

1 成果

(1) 豊かな自然体験活動の提供

昨年度までのライドアドベンチャーと今年度との最大の変更点は、自然体験活動の機会の充実である。過去3年間は、中四国地区の国立青少年教育施設を公共交通機関を利用しながら移動するというダイナミックな企画であった。グループで力を合わせての公共交通機関での移動、室戸青少年自然の家でのスノーケリングや廃校水族館の見学、大洲青少年交流の家でのスポーツクライミング等の体験活動を盛り込んだ内容であったが、自然体験活動が十分に確保できているとは言えなかった。

これまでのライドアドベンチャーでは、日中のほぼすべての時間が公共交通機関による移動となり、その中での自然体験活動の充実は困難であったため、今年度は移動を山口県内に限定し、さらにマウンテンバイクを漕いで移動するという方法に変更した。その結果、テント泊、野外炊飯、海水浴、シーカヤック等、自然体験活動の機会を増やすことができた。また、これまでの課題であったバス運転の負担軽減をすることができた。



(2) 同じ活動を繰り返し取り入れることでの成長

ライドアドベンチャーのメインプログラムはマウンテンバイクでの移動である。初めは、マウンテンバイクの扱いに慣れず、上り坂の度に歩いたり、隊列が長くなったりにしていたが、日を追うごとにグループとしてまとまって漕げるようになった。また、野外炊飯、買い物体験、テント設営を複数回行ったことで、前回の課題を次に生かす機会があり、グループで課題を解決するために試行錯誤しながら活動する参加者の姿が見られた。



(3) 地域資源の発掘

今年度のライドアドベンチャーでは、山口市、萩市、長門市をマウンテンバイクで走行した。ミッションやチェックポイントとして、佐波川関水、ふれあいパーク大原湖、雲林寺、むつみフラワーロード、松陰神社、村田清風記念館、貴布弥神社、角島灯台等を設定したことで、参加者にとっては、郷土や地域の新たな良さを発見する機会となった。また、山口県油谷青少年自然の家に宿泊し、シーカヤック体験等を行い交流できたことも成果の一つである。



2 課題

- 安全なプログラム運営を行うために、適切な対応が取れるようなスタッフ配置や緊急時対応等についての検討が必要である。
- ICT 活用のためにLTEのタブレット端末をレンタルしていたが、電波が悪くLTEで通信できない場所が多かったため、本所のモバイルWiFiを常時使用することになった。電波状況や充電方法の確認をしておくといよい。

V 調査結果

1 調査の目的

参加者の自己肯定感の醸成を目的とした教育事業「ライドアドベンチャー」において、事業評価および成果の普及、ならびにプログラムおよび指導法の改善に資するデータを得ることを目的として調査を実施した。その際、「プログラムや指導により参加者がどのような体験をしたか」という視点を自己肯定感の変化に関わる要因としてとらえ、あわせて評価・検討した。

なお、調査分析にあたっては、山口大学教育学部の沖林洋平准教授にご協力いただいた。

2 質問紙の構成

(1) 自己肯定感に関する質問紙調査

本事業で育みたい「自己肯定感」を、「ありのままの自己を受け入れる心を基盤に、自己の成長や他者との関係に対して前向きに関わろうとする態度」と定義づけ、その要素を①自己受容、②努力志向、③対人積極性として質問紙を構成した。それぞれの要素について、①自己受容は平石¹⁾が作成した「自己肯定意識尺度」から「自己受容」因子（8問）を、②努力志向は梶田²⁾が作成した「自己成長性検査」のうち「努力主義」因子（9問）を、③対人積極性は平石¹⁾が作成した「自己肯定意識尺度」から「自己表明・対人的積極性」因子（8問）を使用し、各設問について「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」の5段階で回答を求めた。

(2) 批判的思考態度に関する質問紙調査

重枝ら³⁾が作成した「批判的思考態度尺度」の6問を使用した。回答は(1)と同様の方式とした。

(3) 事業中の体験内容に関する質問紙調査

西田ら⁴⁾が作成した「児童用組織キャンプ体験評価尺度」から「自然との触れ合い体験」因子を除いた「挑戦・達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」「自己注目体験」の4因子16問を使用し、各設問について「なかった」「たまにあった」「ときどきあった」「よくあった」の4段階で回答を求めた。

表1：質問紙調査に用いた質問文と因子構成

<自己受容> 欠点のひとつやふたつあってもかまわないと思う。 自分なりの個性を大切にしている。 自分の個性を素直に受け入れている。 自分には良い面が全然ない。＊ 自分の悪いところが気になってしまう。＊ やれば何かできるというそんな自信がある。 私には私なりの人生があってもいいと思う。 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。 <努力志向> 一度自分で決めたことは途中で嫌になってもやり通すよう努力する。 他の人に認められなくても、自分の目標に向かって努力したい。 なんでも手がけたことには最善を尽くしたい。 現在の自分が幸福だと思う。 努力さえすれば成績は良くなると思う。 チャンスを逃さなければ、能力のある人は偉くなれると思う。＊ 人の一生は案外偶然の出来事で決まるものだと思う。＊ 人とうまくつき合っている方である。 どんな不幸に出会ってもくじけないだろうと思う。 <対人積極性> 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。 人前でもありのままの自分を出せる。 友達と真剣に話し合う。 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。 友達関係が自然と広がっていく。 自主的に友人に話しかけていく。 相手に気を配りながら自分の言いたいことを言うことができる。 疑問だと感じたらそれを堂々と言える。	<批判的思考態度> 自分の考えとは違う考えの証拠はないかということをしっかり考える。 判断をするときには、できるだけ多くの事実や証拠を調べる。 はっきりとした根拠にもとづいて行動する。 たとえ自分と意見の合わない人の話であってもしっかり聞くことができる。 他の人の良い意見や考えを受け入れることができる。 人の考え方には自分の考え以外の様々な考え方があると思っている。 <挑戦・達成体験> 自分には出来ないだろうと思っていたことが出来たことがあった。 これまででやったことの無いことに挑戦したことがあった。 何らかの目標を達成することが出来たことがあった。 難しそうと思っていたことが出来たことがあった。 <他者協力体験> グループ（班）の人と仲良く活動したことがあった。 たくさんの人たちと協力しあったことがあった。 カウンセラー（リーダー）と親しく活動したことがあった。 グループ（班）でまとまって活動したことがあった。 <自己開示体験> 誰かに分からないことをどうしたら良いか聞いたことがあった。 自分が思っていることを友達に伝えたことがあった。 人に自分の気持ちを伝えることが出来たことがあった。 誰かがいつも話を聞いてくれた。 <自己注目体験> 自分の良いところや駄目なところについて考えたことがあった。 自分から新しいことを知ろうとしたことがあった。 みんなと頑張ることの大切さを考えたことがあった。 自分のわがままさを考えたことがあった。 （＊が付いている設問は逆転項目として使用）
--	---

3 調査の手続き

調査の実施に先立ち、プレステージ初日の保護者説明会において、調査の目的と方法、個人情報の保護に関する事項について説明し、書面で同意を得た。

自己肯定感に関する質問紙調査および批判的思考態度に関する質問紙調査は、プレステージ初日（Pre1）、メインステージ初日（Pre2）、メインステージ最終日（Post1）、メインステージ最終日から1か月後（Post2）の計4回調査を行った。キャンプ中の体験内容に関する質問紙調査は、メインステージ最終日（Post1）に1回調査を行った。Pre1、Pre2、Post1 調査は参加者が集合した状態で実施した。Post2 調査は本所から参加者自宅に質問紙を郵送し、各家庭で記入後、返送してもらった。

4 四年間の調査結果

（1）各年度の結果

各年度の結果を表2～表5に示す。全体的な傾向として、Pre 調査から Post 調査にかけて自己肯定感と批判的思考態度の各因子得点が向上していることが分かる。これに反するものとして、2023 年度は Pre2 から Post1 にかけて自己肯定感に関する「自己受容」「対人積極性」の因子得点が低下していた。ただし、Post2 では Pre2 および Post1 よりも得点が上昇していた。各因子の Post1 から Post2 にかけての変化を見ると、批判的思考態度の得点は概ね横ばいかやや低下しているのに対し、自己肯定感、特に「自己受容」は全て、「努力志向」は3回の調査で向上していた。これらのことから、「自己受容」や「努力志向」といった要素がプログラム後も継続して維持・向上していったことが推測される。

体験内容では、調査を行わなかった 2022 年度を除く 3 回の調査全てにおいて、①他者協力体験、②挑戦・達成体験、③自己開示体験、④自己注目体験の順で高い得点となった。このことから、各年度のプログラムにおける参加者の体験が似通った傾向にあること、またプログラムにおいて他者との協力や課題への挑戦の機会を多く提供していたことが推測される。また、比較的点数の低い「自己注目体験」においても、西田ら⁴⁾の示したキャンプの平均値よりも高い値を示していることから、全体的に多くの体験ができるプログラムとなっていたと考えられる。

表 2：2021 年度の調査結果

因子	Pre1 (N=11)	Pre2 (N=11)	Post1 (N=11)	Post2 (N=11)
自己肯定感				
自己受容	27.64 (6.73)	28.73 (5.51)	30.73 (5.19)	31.64 (4.94)
努力志向	30.64 (4.06)	31.18 (4.15)	32.09 (4.12)	32.70 (3.00)
対人積極性	26.64 (6.63)	27.45 (7.04)	30.55 (5.02)	30.45 (5.63)
批判的思考態度				
証拠の重視	10.82 (2.69)	10.91 (2.07)	11.82 (2.12)	11.27 (1.96)
他者意見尊重	12.55 (2.35)	11.73 (2.22)	12.36 (2.19)	12.27 (2.00)
体験内容				
自己注目体験	-	-	8.45 (1.67)	-
自己開示体験	-	-	10.27 (1.48)	-
他者協力体験	-	-	11.09 (1.50)	-
挑戦・達成体験	-	-	10.73 (1.21)	-

表中の数値は平均値、括弧内は標準偏差を表す。

表 3：2022 年度の調査結果

因子	Pre1 (N=13)	Pre2 (N=13)	Post1 (N=13)	Post2 (N=13)
自己肯定感				
自己受容	30.31 (4.70)	31.38 (2.92)	31.65 (4.00)	32.92 (4.27)
努力志向	30.92 (3.38)	32.23 (1.80)	32.76 (4.21)	33.00 (3.06)
対人積極性	27.89 (6.36)	29.38 (4.99)	32.23 (3.85)	31.85 (5.36)
批判的思考態度				
証拠の重視	10.46 (2.13)	12.08 (1.94)	12.23 (1.58)	12.00 (2.08)
他者意見尊重	11.96 (2.29)	13.08 (1.44)	13.38 (1.90)	13.31 (1.59)

表中の数値は平均値、括弧内は標準偏差を表す。
Post1調査において体験内容の質問を行わなかったため、体験内容4因子の数値は不記載。

表 4：2023 年度の調査結果

因子	Pre1 (N=14)	Pre2 (N=14)	Post1 (N=14)	Post2 (N=14)
自己肯定感				
自己受容	30.64 (4.56)	28.78 (6.29)	27.93 (4.93)	30.36 (4.06)
努力志向	31.36 (4.01)	31.66 (4.69)	31.68 (4.54)	31.71 (4.56)
対人積極性	30.57 (5.92)	29.71 (7.22)	28.79 (8.09)	29.93 (6.72)
批判的思考態度				
証拠の重視	10.68 (2.12)	10.86 (2.07)	11.21 (3.21)	10.57 (2.69)
他者意見尊重	12.93 (1.83)	11.57 (3.31)	11.79 (2.45)	11.93 (2.43)
体験内容				
自己注目体験	-	-	8.71 (2.79)	-
自己開示体験	-	-	9.64 (1.63)	-
他者協力体験	-	-	9.93 (2.09)	-
挑戦・達成体験	-	-	9.71 (2.15)	-

表中の数値は平均値、括弧内は標準偏差を表す。

表 5：2024 年度の調査結果

因子	Pre1 (N=15)	Pre2 (N=16)	Post1 (N=16)	Post2 (N=16)
自己肯定感				
自己受容	31.12 (4.80)	30.13 (5.62)	30.81 (5.90)	33.25 (4.70)
努力志向	32.80 (4.21)	30.38 (4.54)	32.38 (3.69)	32.25 (4.19)
対人積極性	27.20 (6.53)	25.69 (5.55)	29.19 (6.78)	29.38 (7.85)
批判的思考態度				
証拠の重視	11.33 (2.33)	10.25 (2.38)	11.00 (2.57)	11.13 (2.76)
他者意見尊重	12.73 (2.17)	11.69 (2.42)	12.69 (1.72)	12.63 (2.15)
体験内容				
自己注目体験	-	-	7.63 (3.08)	-
自己開示体験	-	-	8.50 (2.55)	-
他者協力体験	-	-	10.81 (1.24)	-
挑戦・達成体験	-	-	10.19 (1.91)	-

表中の数値は平均値、括弧内は標準偏差を表す。

(2) プログラムの違いによる自己肯定感の変化と体験内容の比較

4年間のプログラムを、メインアクティビティの違いから「公共交通機関中心(2021~2023)」と「自転車中心(2024)」に分け、自己肯定感の変化と体験内容の比較を行った。

自己肯定感3因子の変化を、プログラムと調査時期の二元配置分散分析により検討したところ、「自己受容」「対人積極性」に調査時期の有意な主効果が認められた。プログラムの主効果やプログラムと調査時期の交互作用は有意でなかった。調査時期の多重比較を行ったところ、「自己受容」得点は Post2 が他の調査時期より有意に高く、「対人積極性」得点は Post1、Post2 が Pre1、Pre2 双方より有意に高かった(図1~3)。

これらの結果からは、メインアクティビティの違いに関わらず、本事業のプログラムデザインが参加者の自己肯定感、とりわけ自己受容と対人積極性の向上について良い影響を与えていることが推察された。中でも、「自己受容」得点が事業終了1か月後にさらに向上していることから、参加者が日常に帰った後も時間をかけて事業中の体験をふりかえり、自身のことを受け容れていった姿が浮かんでくる。

次に、体験内容4因子について、プログラム同士の得点をt検定により比較した。結果、「自己開示体験」において公共交通機関中心のプログラムが自転車中心のプログラムより有意に得点が高いという結果が得られた(図4)。

この結果からは、公共交通機関中心のプログラムにおいて、移動時間中にグループのメンバー同士で互いのことを話す機会が多くとられた姿が浮かんでくる。有意差は認められなかったが、「自己注目体験」も公共交通機関中心のプログラムの得点が1ポイント近く高い結果となっており、身体的に負荷が低い活動において、自己と向き合う機会がより増えていたことが推察される。

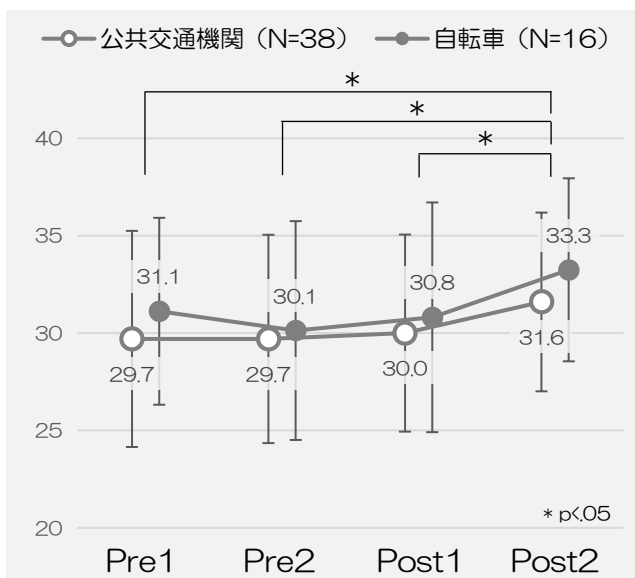


図1：プログラムの違いによる自己受容得点の比較

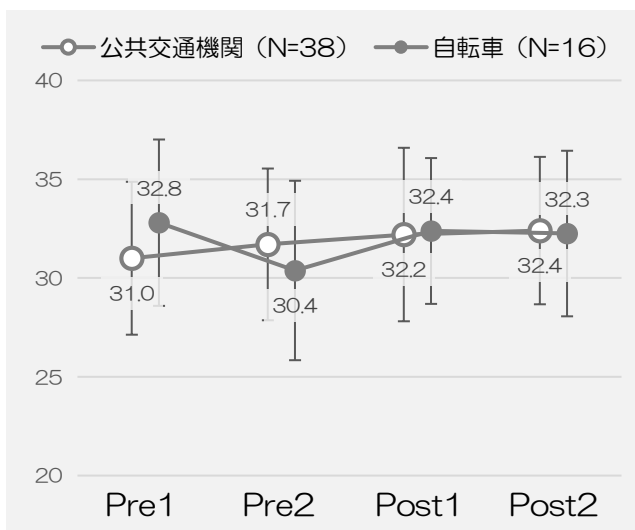


図2：プログラムの違いによる努力志向得点の比較

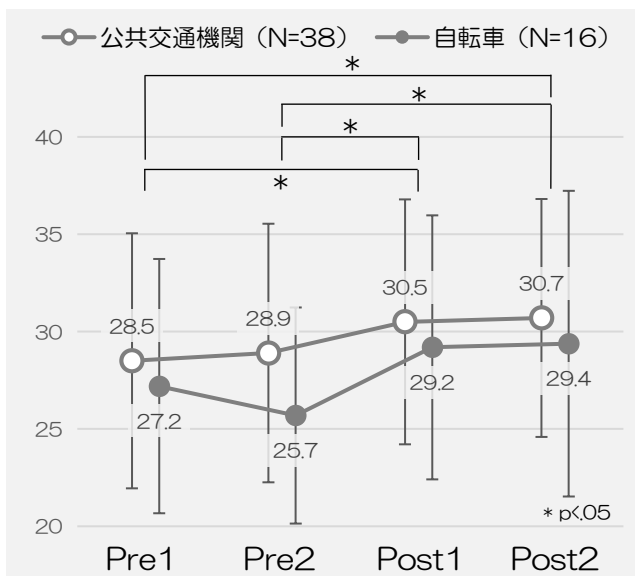


図3：プログラムの違いによる対人積極性得点の比較

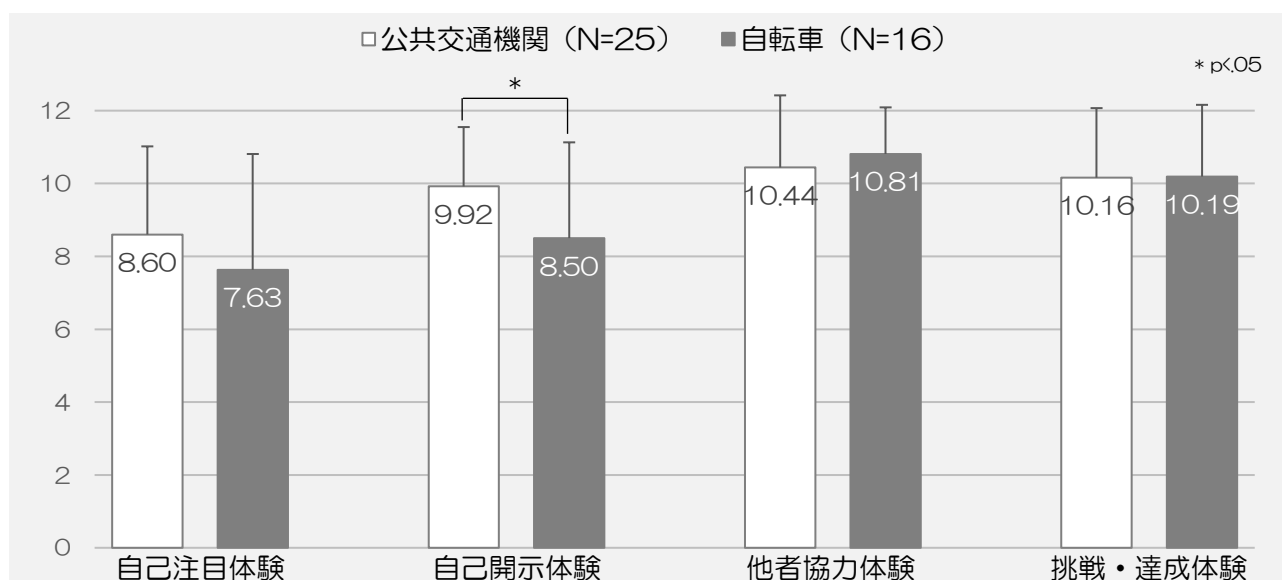


図 4：プログラムの違いによる体験内容の比較

- 1) 平石賢二 (1990)：青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—, 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 217-234.
- 2) 梶田鋭一 (1975)：青少年の内的成熟過程に関する検討—自己成長性の発達状況をめぐって—, 教育の成果分析研究会「青年の内的成熟に関する研究」, 7-37.
- 3) 重枝孝明、宮木秀雄、沖林洋平 (2021)：インフュージョンアプローチ型授業が児童生徒の批判的思考態度に及ぼす影響、学習開発学研究, 13, 107-115、広島大学大学院人間社会科学研究所.
- 4) 西田順一、橋本公雄、柳敏晴 (2002)：児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、野外教育研究, 6(1), 49-61.

5 事業効果の分析

(1) ライドアドベンチャーにおける発達心理学的モデルの検討

活動の前と後を比べると、自己受容や努力志向、対人積極性、他者意見尊重の得点が上昇したことが分かった。自己受容は「自分なりの個性を大切にしている」という気持ちである。努力志向は、「なんでも手掛けたことは最善を尽くしたい」という気持ちである。対人積極性は、「友達と真剣に話し合う」という気持ちである。徳地青少年自然の家のプログラムでは、繰り返しこのような気持ちを高めることを支持するデータが得られた。以上の傾向は、2021 年以降繰り返し追認されました。本プログラムは、児童が自分を肯定したり、他者と積極的にかかわったり、他者の意見を尊重したりする気持ちを高める効果があることが分かった。

クラスター分析は、2022 年、2023 年に引き続き実施している。活動の効果がどの程度定着したかということに関する参加者の傾向を示している。2022 年の分析結果では、自己受容や対人積極性が大きく高まったグループと努力志向のみが高まったグループがあった。これに対して、2023 年の分析結果では、自己受容と他者意見尊重が高くなるグループが得られた。2024 年では、努力志向が上昇したクラスターと全体的に得点が上昇したクラスターが見られた。努力志向が上昇したクラスターは 5 年生が多く、全体的に上昇したクラスターは 6 年生に多く見られる。

以上の結果は以下のようにまとめることができる。まず、自己受容や努力志向、対人積極性、他者意見尊重に関わる気持ちは活動によって高くなるということである。この傾向については、おおむね学年や性別にかかわらず一貫するものと言える。同様の結果は、2021 年、2022 年、2023 年にも示されている。2023 年の特徴としては、得点の上昇の幅が大きいというものである。とりわけ対人積極性

については全体的上昇クラスターでは 7.5 ポイント、自己受容については 5 ポイント程度の上昇が見られた。

2023 年は、自己受容の定着に影響を及ぼす直後の因子として、対人積極性と自己開示体験の組み合わせの効果がみられた。他者と積極的に関わった際に、自分のことをわかってもらえた、自分のことをアピールできたという実感が高い自己受容の定着につながることになるのである。これを受けて、2024 年ではプログラムの前後による得点の変化量に注目した。その結果、全体的に得点

が上昇したクラスターは、プログラム後の自己受容得点の上昇に対して他者意見尊重の態度がポジティブに影響しているのに対して、努力志向のみが高くなったクラスターは他者意見尊重を重視する態度が自己受容に対してネガティブに影響することが限定的に示された ($\beta=2.01$ 、 $p=.008$)。自己受容というのは、自尊感情と関係する心理的な機能で、自己に対する基本的なポジティブ感情である。2024 年調査結果からは、自己受容のきっかけとなるのは他者意見を尊重する態度であることが示されたと考えられる。ただし、それは 6 年生に多く見られる変化であった。5 年生は努力志向が上昇したクラスターに多く含まれていた。以上の結果を考えると、まず、努力志向の上昇が、その他の心理的機能へのポジティブな影響を及ぼすという心理的モデルを仮定することができる (図 5)。

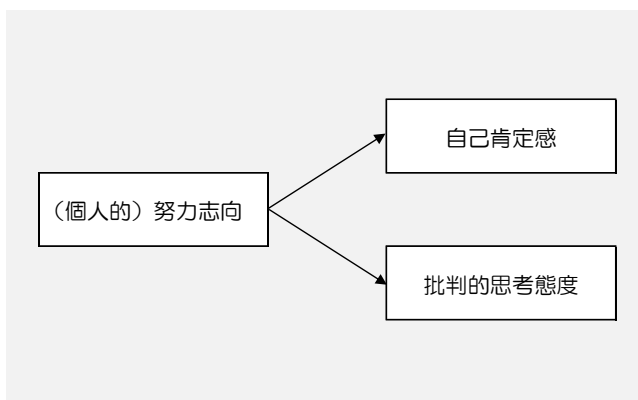


図 5：努力志向が自己肯定感や批判的思考態度を高める心理的モデル

(2) 経年分析の結果から見えてくる展望

本研究では、ライドアドベンチャーが児童の心理に及ぼす影響について検討されてきた。全体的には、ライドアドベンチャーは児童の自己肯定感にも批判的思考態度にもポジティブな影響を及ぼしていることが追認されている。その理由はなぜなのかということについては、各年のプログラムにおける工夫を検討することが重要不可欠である。分析者がプログラム担当者の先生方からお聞きした範囲では、児童の移動スケジュール、移動範囲は毎年大きな工夫を凝らしていたことが推察される。分析者として、本プログラムの効果検証を担当してきた結果として頑健性が高いデータとしては、自己受容を高めるとのことだと思われる。参加児童は、厳しい環境での生活を乗り越えることによって、自己に対するポジティブな感情を抱くということが本調査によって繰り返し得られているデータである。野外活動のような、児童にとっては過酷な環境でのプログラム遂行において、まず個人で努力することが大事であるという意識が 5 年生では高められる、また、6 年生はそれ以外の因子が上昇するという結果が得られたことは、比較的まとまった時間を必要とする野外活動による自己肯定感や批判的思考態度の発達モデルを示す有力な知見となるとと思われる。

このような、児童の自己肯定感や批判的思考態度に関する発達心理学的モデルを得ることができたことは、分析者が分析をすることによって得られた合理的な発達モデルである。2023 年と 2024 年はプログラム内容に変更がみられ、また毎年参加する児童も異なる。さまざまな要因が変動しながらも、本調査においてはプログラムを通して、参加児童の自己受容感が高まっていることはプログラムの教育的意義を示していることであると考えられる。

Ⅵ 四年間の取組とその成果

1 徳地アドベンチャー教育プログラム（TAP）の手法を生かしたファシリテーション

徳地アドベンチャー教育プログラム（TAP）とは、山口徳地の自然の中で、一人では解決できない課題に対し、他者と力を合わせて挑戦していく過程を通して、思いやりやチームワーク、自己肯定感を高めるプログラムである。年間約 130 団体、10,000 人が利用しており、本所で最も人気の高いプログラムとなっている。ファシリテーターは、グループの特性や成長度合いに合わせて、最適なアクティビティを提供し、身体的な安全はもちろん、参加者一人ひとりの心理的安全にも配慮して活動を展開している。

ライドアドベンチャーでは、その手法を生かし、参加者が主体的に行程を決め体験学習サイクルを回すことができるように、スタッフは支援を行った。参加者やグループの状況に合わせて、適切な介入を模索することは、スタッフのファシリテーションスキルの向上の機会になった。



2 ICT を活用したプログラム開発

本事業では、グループに 1 台タブレット端末を提供し、それを活用しながらプログラムを進めている。タブレット端末の使用方法としては、天気、移動の経路や時刻表、運賃等の検索、ミッションに関する情報の収集、キャンプディレクターとの連絡等があげられる。また、各グループが持つタブレット端末の GPS をキャンプディレクターのタブレット端末と共有し、緊急の場合の対応がスムーズに行えるようにした。



3 ボランティアスタッフのスキルアップ

ライドアドベンチャーを実施するためには、ボランティアスタッフの存在が欠かせない。本事業では、ファシリテーション的な関わりを基本としているため、スタッフは参加者に直接的な指示をするのではなく、参加者同士が主体的に関わり合えるように見守ったり、声をかけたりする。参加者との距離感や声のかけ方に悩むボランティアスタッフの姿を見てきた。その都度スタッフ同士で話し合い、参加者にとって最良の関わり方を考え行動することによって、スタッフのスキルアップが行われていた。ライドアドベンチャーでスタッフとして関わったボランティアスタッフは、次年度以降、自然の家の法人ボランティアの中心として活躍する存在になっており、ボランティアの育成の面でも成果があったといえる。



おわりに

令和4年度、文部科学省は「子どもの体験活動推進宣言」（令和4年6月）を発表し、令和6年度は最終年度でした。国立山口徳地青少年自然の家でも体験活動の重要性を皆で意識し直しました。本所の看板事業「ライドアドベンチャー！」を、自信をもって良質な体験活動として提供できるよう、日頃から皆で精進してきました。本事業を通して多くのことを皆で学んでいます。

早いもので、4年間実施してきた「ライドアドベンチャー！」。今年度も関係各所や保護者の皆様、山口大学教育学部 沖林洋平准教授の協力を得て、充実した事業にすることができました。そして何より、参加者がゴールに向かって、グループの仲間とともに自分たちの力を信じて突き進む姿や、やり遂げた達成感に満ちた表情からは、新しい地域の担い手となる頼もしい力を感じることができました。

コロナ禍や予算の削減、大人の働き方改革、家庭の事情、様々な理由で以前のように子供たちが存分に体験活動をする時間が減少しています。しかし、理由はいかなるものであっても、失ってしまった子供たちにとっての体験すべき適齢年齢を取り戻すことはできません。すべての子供に体験活動を提供できるのは、私たち大人です。私たち施設職員、行政職員、学校職員、企業、そして保護者・地域の皆さんが未来を担うすべての子供たちのためにつながり、実践意欲をもって体験活動を提供していかなければ子供たちに申し訳なく思います。そのためには、使命感をもって我々が効果的につながり、一緒に知恵を絞っていくことが大切だと思っています。

今後ともよろしくお願いいたします。

国立山口徳地青少年自然の家 次長 福江 大幸

令和3年度 担当職員

事業推進係長兼企画指導専門職	黒田 雅秀
企画指導専門職付	姫野 大夢
企画指導専門職付	山川 晃

令和4年度 担当職員

事業推進係長兼企画指導専門職	黒田 雅秀
企画指導専門職	姫野 大夢
企画指導専門職付主任	丸 宏樹

令和5年度 担当職員

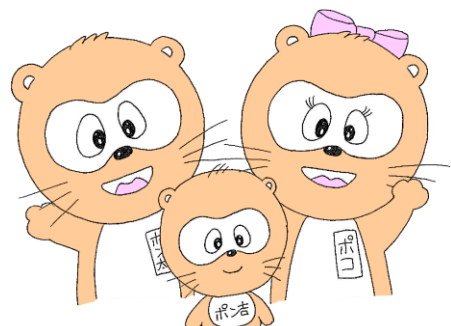
企画指導専門職（班長）	姫野 大夢
主幹兼事業推進係長	東島 憲之
企画指導専門職	藤井 恵美子
企画指導専門職付主任	丸 宏樹

令和6年度 担当職員

企画指導専門職	藤井 恵美子
主幹兼事業推進係長	東島 憲之
主任企画指導専門職	小野 栄策
事業推進係員	石橋 将平

執筆者

山口大学教育学部准教授	沖林 洋平
企画指導専門職	藤井 恵美子
企画指導専門職付主任	山川 晃



令和3～6年度実践研究事業
ライドアドベンチャー報告書

発行月：令和7年3月

発行者：独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立山口徳地青少年自然の家

住 所：〒747-0342

山口県山口市徳地船路 668

T E L：0835-56-0112

E-mail：tokuji-kikaku@niye.go.jp